

蔵王町 教育課程特例校による特別の教育課程の編成の方針等について

実施年度：令和4年度

令和5年5月17日

1. 蔵王町の特別の教育課程を編成する学校一覧

04 宮城県		
学 校 名	管理機関名	設置者の別
蔵王町立円田小学校	蔵王町教育委員会	公立
蔵王町立平沢小学校	蔵王町教育委員会	公立
蔵王町立永野小学校	蔵王町教育委員会	公立
蔵王町立宮小学校	蔵王町教育委員会	公立
蔵王町立遠刈田小学校	蔵王町教育委員会	公立

2. 特別の教育課程を編成・実施している学校の特別の教育課程の編成の方針及び自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学 校 名	特別の教育課程の編成の方針及び自己評価・学校関係者評価結果の公表ウェブサイト名・URL 等
蔵王町立円田小学校	ホーム 「ざおう英語活動 News」 http://enda-es-zao.ed.jp/
蔵王町立平沢小学校	ホーム 「英語活動」 http://hirasawa-es-zao.ed.jp/
蔵王町立永野小学校	ホーム 「ざおう英語活動」 http://nagano-es-zao.ed.jp/
蔵王町立宮小学校	ホーム 令和4年度「ざおう英語活動」 http://miya-es-zao.ed.jp/
蔵王町立遠刈田小学校	ホーム「ざおう英語活動便り」(遠刈田小学校版) http://togatta-es-zao.ed.jp/

3. 特別の教育課程の概要

蔵王町の学校教育においては、児童生徒が社会変化の激しい中で主体的な生き方を求める資質を育むため、英語によるコミュニケーション力の向上を目指す。特に、情報化、国際化の中で異文化と出会い交流することや、将来グローバル化した社会において自立した社会生活を送ることができるための英語によるコミュニケーション力の向上を目的とする。そのため、これまで培ってきた蔵王町の教育活動の特色を生かしながら、学校・家庭・地域・行政が連携・協力して「知」「徳」「体」のバランスのとれた子どもを育むことを基盤として、小学校第1学年から第6学年まで特別教科・領域「ざおう英語活動」として教育課程を編成したものである。

4. 特別の教育課程を編成して教育を実施する必要性

蔵王町には、終戦後南国パラオからの引揚者が開拓した北原尾地区があり、これまでもパラオ共和国との交流を続けてきた。平成27年、天皇・皇后両陛下に北原尾地区へ行幸いただいた。平成28年、政府より2020年東京オリンピック・パラリンピック、パラオ共和国のホストタウン認定を受け、オリンピック参加選手の事前合宿の受け入れを行い、平成31年から「ざおう・パラオ子ども国際交流事業」として継続的な相互の国際交流を行っている。また蔵王町は、四季折々の美しさとスキーリゾートとして名高い蔵王連峰、開湯四百余年の遠刈田温泉がある観光の町として、インバウンドの受け入れを積極的に進めているが、観光施設等の従業員の英語力不足や町民の外国人観光客への英語によるコミュニケーション力不足が喫緊の課題となっている。そして、蔵王町は、早くから小・中学校にALTを配置するなど英語教育に力を入れてきた経緯もありこうした背景から、幼・小・中学校教育の柱として早期からの英語教育の推進を望む町民の声が多かった。

そのため、これまでの取り組みを土台として、さらに英語教育を充実させるために、教育課程の中に英語教育を系統的に位置付ける必要から、平成30年4月より、小学校において特別の教育課程を編成する教育課程特例校の指定をいただき、「ざおう英語活動」として推進している。これまで2名だったALTを4名に、さらにCIR(国際交流員)1名を配置し、ネイティブな英語に触れる機会を多くして国際感覚を養わせたい。そし

て、蔵王町で生まれ育つ子どもたちに、英語によるコミュニケーション力を身に付けさせ、地域の良さを発信したり、継続的な相互国際交流を行ったり、グローバルな視点をもって世界に貢献する人材に育てたいと考える。また、学校教育だけではなく、町の農林観光課、生涯学習課、スポーツ振興課、子育て支援課など関係各課と連携し、町全体で英語によるコミュニケーション力の向上に努め、「国際交流の町 蔵王町」として、町の活性化につなげていきたい。

5. 「ざおう英語活動」にかかわる特別の教育課程の編成

段階	時数の扱い	活動の主な内容と適切性の根拠
小学校 低学年	ざおう英語活動 (週1時間) ・1年生活科(102時間)から34時間 ・2年生活科(105時間)から35時間	<ul style="list-style-type: none"> ・歌やチャンツ、ゲーム等の友達と伝え合う活動や表現する活動を通して、挨拶などの簡単な英語を「聞く」「話す」ことに慣れ親しむ取組を行う。 ・英語を使って友達と伝え合う活動を通し、生活科で育成する、進んで交流する能力(内容(8)「生活や出来事の交流」)、気付いたことや楽しかったことなどを言葉、動作、劇化などで表現し、考える力(目標(4)「生活科特有の学び方」)を育む。
小学校 中学年	ざおう英語活動 (週1時間) ・外国語活動(15時間)から15時間 ・総合的な学習の時間(55時間)から20時間	<ul style="list-style-type: none"> ・「外国語活動」を標準にしながら、「聞く」「話す」表現活動を十分に取り入れ、英語による表現に慣れ親しませていく。また、地域の文化や伝統に関することや、国際理解に関する内容を取り入れる。 ・総合的な学習の時間で育成する、課題を解決する資質や能力、探究的な活動に取り組む能力につながる。

小学校 高学年	ざおう英語活動 (週2時間) ・外国語活動(50時間)から50時間 ・総合的な学習の時間(55時間)から20時間	・「外国語活動」を標準にしなから、「聞く」「話す」に加え、「読む」「書く」活動も取り入れる。 ・目的意識や必要感をもって会話し、簡単な英語を読んだり、書いたりできるように発展させ、コミュニケーション能力をさらに高めることができる。 ・総合的な学習の時間で育成する、課題を解決する資質や能力、探究的な活動に取り組む能力とともに、自己の生き方を考えさせることにつながる。
------------	---	---

「ざおう英語活動」によって培われるコミュニケーション能力は、小学校段階のみならず、中学校以降も主体的な学びや対話的な学びの姿となり、グローバルな人材育成につながる。

6. 特別の教育課程を開始した年度

平成30年4月1日(6年目)

7. 特別の教育課程の取組の期間

令和10年3月31日まで

8. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- 計画通り実施できている
- ・一部、計画通り実施できていない
- ・ほとんど計画通り実施できていない

(2) 実施状況に関する特記事項

英語のネイティブスピーカーであるALT4名、CIR1名、そして英語専科教員2名を小学校5校に配置し、1～6年生の「ざおう英語活動」に、組合せを考慮し各学年に英語専科教員1名、ALT1名が入り授業を行っている。児童は、英語が身近に感じられる環境の中、意欲的にざおう英語活動に取り組んでいる。保護者や地域からも、

児童が家庭でも英語に興味を持って話そうとするなど英語教育特区の効果が高まっている様子が感じられるとの評価をいただいている。

(3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- 実施している
- ・実施していない

<特記事項>

授業参観では、各小学校がざおう英語活動の授業を積極的に行い、保護者や地域へのざおう英語活動の公開授業も1年に1～2回は行っており、英語教育特区の成果を知ってもらえるよう努めている。地域の人々からもとても賞賛をいただいているところである。

9. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している学校の教育目標との関係

本特例は、蔵王町がパラオ共和国との歴史的背景により、ざおう・パラオ子ども国際交流事業として、毎年両国が中学生を交互にお互いの国に12名ずつ派遣している。また、観光のまち・蔵王町には多くのインバウンドが訪れることから、英語を中心としたコミュニケーション力の育成が求められている。そこで、蔵王町に住む子どもたちが将来グローバルな視点を持って活躍できるよう「ざおう English Education グローバルデザイン ～英語教育特区を活用した活気あるまちづくり～」を蔵王町が一体となって進めている。保育所・幼稚園からの早期英語教育も合わせて進めており、小学校1年生から35時間のざおう英語活動を行う本町では、独自のざおう英語活動年間カリキュラムに基づいて教育活動を実践している。「モチベーションからコミュニケーションへ」のテーマのもと、公開研究会である「ざおう英語活動実践発表会」を毎年開催し、広く県内外にその成果を発表し更なる実践力の向上につなげている。子どもたちは、日常でも英語を使うようになり、大きな成果として「英語を聞き取る力」が高まっていることが実感される。また、中学3年生が英語検定試験を無料で受験できるように町が補助し

ており、資格取得者が年々多くなるなど成果が上がってきている。

令和4年度全国標準学力調査における蔵王町中学校1年生英語（小学校段階での「ざおう英語活動」の成果指標とするため実施）の調査結果は、中学校1年（令和4年4月当初の段階）の教科：英語における町内3中学校の平均正答率は、全国平均正答率 79.7%を大きく超える 84.0%となった。英語教育特区として小学校で特別の教育課程を編成し実施している「ざおう英語活動」の指導の成果が表れたものと考えられる。

一方、本町の英語教育の課題としては、特区である小学校では1年生から専科教員により「オールイングリッシュ」の授業を行われているが、中学校の英語の授業ではまだ日本語が使われていることが散見され、小・中学校の接続が十分でないと感じられる。

（2）学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

本町が「ざおう英語活動」により目指しているのは、単に言語としての英語を学ぶことではない。国際交流のためのコミュニケーション力の育成であり、グローバルな人材の育成である。幼児期から小学校低学年・中学年では、音としての英語や人としての外国人に慣れ親しませ、「目で見える」「耳で聞く」活動を重視しながら、「話す」活動にも取り組ませる。そして、小学校高学年では、「聞く」「話す」活動をさらに推進するとともに、「読む」「書く」活動も取り入れている。このことにより、中学校での外国語へのスムーズな移行が可能となる。なお、特に幼児期から小学校低学年段階においては、相手とのスキンシップやリズムカルな身体表現を多く取り入れることにより心・体両面でのコミュニケーション力の基礎を養っておくことで、その後の活動が効果的に行われることを期待している。

令和5年1月に、本特例を実施している円田小学校始め小学校5校の全児童を対象に実施したアンケートの結果は以下の通りである。

《ざおう英語活動についてのアンケート（町内全小学校児童）集計一覧》

○実施期日 令和4年12月20日

○実施方法 Web回答（Googleforms 選択）

項 目	対象人数（427名）	評 価
① ALTの先生の話す英語を聞き取ることが	1～6年全員	良い 50.8%

できるようになりましたか		ほぼ良い 42.2%
②好きなものや気持ちなど、英語の質問に答えることができるようになりましたか	1～6年全員	良い 58.5% ほぼ良い 35.6%
③英語で書かれた文字や文を読むことができるようになりましたか	3～6年全員	良い 52.5% ほぼ良い 36.1%
④アルファベットや物の名前などの英語を書いてみたいと思いますか	1～6年全員	良い 56.4% ほぼ良い 33.7%
⑤英語を使って自分のことを先生や友達に伝えたり、友達の話を聞いたりするのは楽しいですか	1～6年全員	良い 66.5% ほぼ良い 24.6%
⑥もっと英語を話してみたいですか	1～6年全員	良い 61.1% ほぼ良い 27.4%
⑦英語以外の時間（国語や算数など）に、自分の思いや考えを発表したり話したりすることが増えましたか	1～6年全員	良い 41.0% ほぼ良い 41.5%

アンケートの結果、良い・ほぼ良い を合わせると、①英語を聞き取る 93.0% ②英語の質問に答える 94.1% ③英語の文字や文を読む 88.6% ④英語を書いてみたいと思う 90.1% ⑤英語で伝える・英語を聞くのは楽しい 91.1% ⑥もっと英語を話してみたい 88.5% ⑦英語以外の教科で発表が増えた 82.5% と肯定的な回答が 80%～90%と高い割合を示している。ざおう英語活動がほとんどの児童に肯定的に受け止められ、昨年度より肯定数が増え児童の中に定着しつつあると捉えることができる。

ざおう英語活動を実施している町内小学校の関係教員による評価は以下の通りである。

《ざおう英語活動についてのアンケート（町内小学校教員）集計一覧》

項 目	対象人数（32名）	評 価
① 児童は英語を聞き取ることができるようになりましたか	5校の関係教職員	良い 56.2% ほぼ良い 43.8%

② 児童は英語の質問に答えることができるようになりましたか	5校の関係教職員	良い 46.9% ほぼ良い 46.9%
③ 児童はアルファベットや英語で書かれた文字などを読むことができるようになりましたか	5校の関係教職員	良い 31.0% ほぼ良い 58.6%
④ 児童はアルファベットや英語で書かれた単語等を手本や教科書見ながら書くことができるようになりましたか	5校の関係教職員	良い 50.0% ほぼ良い 39.3%
⑤ 児童は英語を学ぶことで以前より自分のことや友達のこと、好きなことなどに興味をもつようになったと思いますか	5校の関係教職員	良い 21.9% ほぼ良い 62.5%
⑥ 児童は英語の時間の学習を生かし、他教科で自分の考えや思いを発表したり話したりすることが増えましたか	5校の関係教職員	良い 15.6% ほぼ良い 62.5%
⑦ あなたは英語活動での学びが、英語のコミュニケーション力を高めることにつながっていると思いますか	5校の関係教職員	良い 46.9% ほぼ良い 50.0%
⑧ ざおう英語活動は、学級経営によい影響をもたらしていると思いますか	5校の関係教職員	良い 37.5% ほぼ良い 62.5%

アンケートの結果、良い・ほぼ良い を合わせると、①英語を聞き取る 100% ②英語の質問に答える 93.8% ③英語の文字などを読む考えや気持ちを英語を使って伝える 89.6% ④英語の手本や教科書を見ながら書く 89.3% ⑤英語を学ぶことで好きなことなどに興味をもつ 84.4% ⑥英語以外の他教科での発表や話が増えた 78.1% ⑦英語のコミュニケーション力が高まっている 96.9% ⑧英語活動が学級経営によい影響がある 100.0% と肯定的な回答が80～100%と高い割合を示している。特に、英語を聞き取ることができる、ざおう英語活動によりコミュニケーション力が高まり学級経営に良い影響をもたらしているは、ほぼ100%の評価を得ている。「ざおう英語活動」の効果がほとんどの教師に評価され、児童の英語に対する興味・関心が高まり、英語によるコミュニケーション力が児童の発達段階に応じて確実に育って

いると思われる。

令和4年度全国標準学力調査における蔵王町中学校1年生英語（小学校段階でのざおう英語活動の成果指標とするため実施）の調査結果は以下の通りである。

《令和4年度全国標準学力調査 1年英語 調査結果》

○実施期日 令和4年4月17日

○実施対象 町内3中学校1年（93名）

学年・教科	全国平均正答率	町内3中学校平均正答率
中学校1年 教科：英語	79.7%	84.0%

調査の結果、中学校1年（令和4年4月当初の段階）の教科：英語における町内3中学校の平均正答率は、全国平均正答率 79.7%を大きく超える 84.0%となった。英語教育特区として小学校で特別の教育課程を編成し実施している「ざおう英語活動」の指導の成果が表れたものと考えられる。

この結果は、本町が「ざおう英語活動」という特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している学校の教育目標の一つある、情報化、国際化の中で異文化と出会い交流することや、将来グローバル化した社会において自立した社会生活を送ることができるための英語によるコミュニケーション力の向上やグローバルな人材の育成に繋がるものと言える。

10. 課題の改善のための取組の方向性

9に示すような課題を踏まえて、本町では小・中学校の連携の強化を図る必要がある。そのために、まず、ざおう英語活動推進会議には、小・中学校の英語教育担当や町の関係者も入り、情報交換を十分行いながら小・中学校の連携を図っていく。また、連携を強化するためには、小学校のざおう英語活動でどのような授業が行われているかを中学校の英語教員が把握する必要がある。小学校のざおう英語活動の授業を中学校の英語教員が参観したり小学校の教員が中学校の英語の授業を参観したりする機会を定期的に設け、小・中学校が連携し効果的な英語の授業を実践できる体制をしっかりと構築していきたい。

英語教育特区の指定を受け、6年目に入った。小学校のざおう英語活動で培われた力

を持った子どもたちが中学生となり、その成果が表れることが期待される。国際交流のためのコミュニケーション力が高まり、将来に向けグローバルな人材を育成できるようにしっかりと取り組んでいきたい。